岐阜・篠脇（しのわき）遺跡（東氏館跡）

1 所在地　岐阜県郡上郡大和村大字牧字志の脇九三四の六他

2 調査期間　一九八〇年（昭55）六月～一九八三年（昭58）三月

3 発掘機関　大和村教育委員会

4 調査担当者　青木　久・大江　命

5 遺跡の種類　居館跡

6 遺跡の年代　一四世紀～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

岐阜市から長良川をさかのぼること約二五kmで支流の一つ栗巣川との合流点に達する。篠脇遺跡はここよりさらに栗巣川を二km程さかのぼった四周を山に囲まれた左岸段丘上に立地する。

当遺跡の立地する大字牧地内には、早くから篠脇城跡の所在が知られている。

承久の乱―承久三年（一二二一）において関東方に加わり、戦功のあった下総国の名門千葉氏の一族東胤（八幡）行は、本領のほかに美濃国郡上郡山田庄を加領された。胤行は将軍の側近として鎌倉に在番していたが、その子行氏が来郡して阿千葉城（大和村剣地内）を築いた。行氏の長子時常は跡目を継いだが夭死し、次子氏村のときさらに大きな規模をもつ篠脇城を築き、以降、東氏歴代の在城は二三〇余年間に及んだ。一三代東常慶の天文九年（一五四〇）篠脇城は越前の朝倉勢に攻められ、翌年には再度の襲撃をうけた。常慶は朝倉勢の攻勢に危険を感じ、本城を南方の東殿山（郡上郡八幡町）に移した。

この間、応仁二年（一四六八）九代東常縁が下総国へ出陣中、斎藤妙椿に攻められて篠脇城が落城した。これを悲しんだ常縁は、人を介して妙椿に歌を送ったところ、妙椿は心を動かされて篠脇城を常縁に返還しており、戦国の世に珍しい出来事として語り草になっている。

篠脇城跡は標高五七〇mの篠脇山にあり、本丸をはじめ各郭・竪堀・堀切など中世山城の遺構をよくとどめているところから一九七三年一月、岐阜県史跡に指定されている。

一方、東氏の居館跡については、その所在地・規模・構造など伝承地もなく不明であった。地形などからみて篠脇城跡と栗巣川にはさまれた左岸段丘の平坦地（幅一〇〇m、長三〇〇m余の大きさ）に営まれていたのではないかと推定されていたのであるが、かなり早い時期に開田されていること、遺物の発見報告例もなく、今日までそ

の所在を確認するまでにはいたらなかった。

一九八〇年六月当地域のほ場整備工事中にこの平坦地の一部から古瀬戸片・天目茶碗片・山茶碗片類や青磁・青白磁・白磁の出土をみ、ただちに工事の中止と工事地区からの一時除外が行われた。調査計画をたて、八〇年七月から八三年度の四次にわたって発掘調査が実施された。

調査の結果、庭園遺構が良好な状態で検出された。池は長円形を呈した約二〇〇㎡の大きさである。中央部に中島が築かれ、池汀部は大小の自然石を組合せ、池底には小礫が敷きつめられている。

因みに、岐阜県内で中世の庭園(池)遺構が発掘調査によって出土したのは、吉城郡神岡町殿の江馬氏下館跡(一九八〇年三月「江馬氏城館跡」として下館ほか七ヵ所の城跡が国史跡に指定された)についで二例目である。

ただ東氏館跡においては、池以外の遺構=特に建物跡群については、栗巣川の氾濫による削平・土石の堆積、さらには後世の開田化による人為的削平等によって部分的に礎石列・雨落溝等が残るのみであり、現在のところ詳細を知ることが困難である。しかしながら調査時の所見によれば、検出遺構の下にさらに下層遺構の存在が推定されており、少なくとも二時期以上の遺構群からなることが考えられ、下層遺構は保存状態が良好かとも考えられる。

出土遺物については現在整理作業が続けられているところであるが、大別すると土器類・木製品・石器類・鉄製品類などがある。なかでも中世の施釉陶器類(碗・鉢・皿・壺・片口など)には瀬戸産・美濃産があり、鉄釉天目茶碗高台部に花押が墨書されたものがある。美濃の中世雑器を代表する山茶碗・小皿片は特に多量に出土している。中国製の青磁・青白磁・白磁には椀・皿・盤・瓶子・鉢・合子などの器形を知ることができる。他に土師質土器・瓦質土器・石鍋・砥石・硯なども出土している。

木製品には椀・皿・杓子・箸・自在鍵・花文釘隠・柱根などがあり、黒漆・赤漆が塗られた椀・皿・曲物などの漆器類も少量ではあるが出土している。

木簡は一点のみであるが、一九八二年度の調査で出土している。出土地点は池の北側に営まれた建物跡(規模不明)の雨落溝に流れこむ一条の排水溝底であり、箸が伴出している。

このように奥美濃の山間辺地という地理的条件を考慮したとき、多種多量のしかも中央から入手したとしか考えざるを得ない遺物をみたとき、いかに東氏の生活が華美であり、都と深いつながりをもっていたかを予想せしめるに十分である。

東氏は奥美濃の郡上地域を支配する武将ではあるが、一方、代々和歌をよくし、勅撰和歌集にも多く載せられている。なかでも九代東常縁は和歌や古典に秀れ、連歌師宗祇に古今集の奥義を伝えた「古今伝授」はつとに著名である。文明一四年(一四八二)極月一八

日付けの常縁が宗祇に宛てた書状中に

此程、当郡之山中に庵室を構候而、乍憚小倉山庄になぞらへ、老之すさミ所とせはやの有増に候　（『大和村史』資料編）

としたためており、小倉百人一首の選者かともいわれている宇都宮頼綱が京都の小倉山麓に構えた山荘になぞらえて、常縁が郡上の山中に庵室を営んだことが知られるのである。当遺跡の園池もこの時に築かれたのではないかと推定されるのである。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「〈進上あんとう三郎□□□

さ□□□」　142×20×3　032

（波多野寿勝）

木簡研究　第五号

巻頭言――木簡史の研究について――　関　晃

一九八二年出土の木簡

概要　平城宮・京跡　平城京二条大路・左京二条二坊十二坪　白毫寺遺跡　藤原宮跡　山田寺跡　阿部六ノ坪遺跡　長岡京跡(1)　長岡京跡(2)　長岡京跡(3)　長岡京跡(4)　仁和寺南院跡　大坂城跡　梶子遺跡　道場田遺跡　野畑遺跡　穴太遺跡　下野国府跡　下野国府跡寄居地区遺跡　長原東遺跡　多賀城跡　払田柵跡　日野川朝宮橋下流　桜町遺跡　出合遺跡　辻井遺跡　助三畑遺跡　肩脊堀の内遺跡　草戸千軒町遺跡　田村遺跡　高畑廃寺　藤田遺跡

一九七七年以前出土の木簡（五）

藤原宮跡

字訓史資料としての平城宮木簡

――古事記の用字法との比較を方法として――　小林　芳規

平城宮出土の衛士関係木簡について　鬼頭　清明

木簡とコンピュータ　田中　琢

書評・『草戸千軒――木簡一――』　水藤　真

彙報

頒価　三五〇〇円　〒四〇〇円